KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

中村俊定文庫
文庫 18
795

陵宝藏

文政三年

庚辰の皐月吉素山の
中乃を小ちう湖巴ち
法ちして添方よあ井ふ

ゆうはの
禾木

宗福田文庫

田舟集

中村俊定文庫

ちゝ潟や人も驚ろる子留時　素磔
皐月の泥をさうる拍子　禾木
酒臭ち仮の調舟や探すらん　磔
吐息なつゝの唄ち林き　木
ち夜の今影もちゝ影晨ろは　葉
菊の香はうつもゝ弥生　木

千代経へよ小袖の紋の花ぞ咲
隣をきしけく俺家久しよ　染
おとろく立風に皆ふきまち　木
川くまたをかつふよの秋　葉
女ふも似せ物ありとさ歌き　木
かたへてを袖と年のをうさ　葉
一里ゆ二里八月夜のりしよ　葉
何ふ刈りてうは立ぬ〜ゆる　木

袖ふ屋よ袖ふ袖ふ袖ふぬ屋の色　葉
よ袖こそし出ぬ元の穿鑿　木
あちよおきまさ生ふ生ふ元ふ　染
彼岸ふ色し一家之義　木
ゆを影も早よ古々の袖袂　染
見ふ川ゆ見ふ小あ仁ほ川　木
立すてふ仕双帝のあ変　染
むふも今も迷ふ思ひ込　木

祢木の法度ふ家しりまもあれ　染
家変ふ同品多く好いろつよ　木
借銭い変の浮世の業おしや　染
有れ立人生涯の孫　木
弱法師も下方ふ眼ふりる　染
記て述日春ても述日　木
身や長破神鄙の名孫を　染
志てう川夜の接拍もおし　木

帯変ふ葉葉の白しも持きてや　染
拍て吹て餞別の笠　木
笑ふもちふ変入多二人連　碎
歯を動ふしも手用立也　木
長を打高や持ふ多の花　碎
う、ふの神なる多くの種　木

あら鷺やいて隠影落かし　木木
扇の風の湖をめくりて　素磔
彩蓮の面を見る身と笑か寒　青隠
あらとはうまを虫の見打れ　木
彩毋しや拍寄の影袖の内　磔
さりくろ云つまる影陸の酒　隠

先川進む同し橋泉の鞍の音　木
名やなしいふ一日の客　磔
林しさふ面の言笑作め言　信
拾あゝ出神と鳴うる　木
巳十ちや人の浮世も俳同志　磔
笑を面ふて蛍を虫をぬく　信
子迷ふ扇やつ石影寒の身　木
年の乞食の市ふ美やく　磔

いとうしや神無月の取合せ　信
思ひくまよふ底の根　進　木
茶会へまゐる者の笠の爰　榮
雛の余波いうつむけてゐる　信
京かけし蓋も黒めて長閑く　木
茶の煙かな多く起く　榮
やもくといとふ凝とも也　信
ちりの冥加人かなし　木

うちうへて波の面いふもぬ時　榮
きりはよくとも岩根の音　信
ゆくわ猶高沖小傍を影　木
書を彩てて月代を判る　榮
ほこを打へかりアをおもれ　信
臼痛ゆめくるつうよ蛍　木
うりあへば母の乳をの負　榮
代日あまりの芳しよ秋　信

萩萩よ肩を寄せ合ふ家持言

情度て戻る　侍

ゆふ夜の暑さかな彩りけ

むさぶりて冥く行の門口

蓮の葉空笑ふやうに咲き

裏咲きをへ高す風見

木　葉　信　木　葉　隠

水無月や湖に固まる五位の夢　子文

きりぎりすよ蓮の風ふほく彩

よいへと門ふ芙蓉人を待し　青位

連て子供の物ゝ八朔　禾木

柱ひ涼しかるる日の書ふ　素葉

撰ばれて小ぬ春のまふ玉　竹龍

文

静さや岩にしみ入る蝉の声　芭蕉

老のはめを誰とかこつ冬ごもり　木節

三味線を猫もうるさし荒まくら　桑弧

植木屋干に映の初鶏　龍

むら雨に影くぬぎ葉夜　文

酒呑むに敷布ら出る　信

引年を膳かへ月と雲　木

倒れて寒の明焼　桑

足袋きぬ人を移る移り住ひ　移

おりふしは小ふる笑ひ笑　文

合点して三歩歩るも気の呆　信

蓮を拝ふ乃へへの蓮　木

茅の戸の屋根に蔦夢ふ雲　桑

一夜ずつ寒の月新　周行

今日も猫門に抱の仕業で　文

眼の和ふうお兵ばよき　信

食むかと発の殺めふ罪なる
持ちなあり書いい法華生
むし長毒言の尾を信じ行
佛は者もまるとるぬ時
家食べと貪こ乗仏なしし
ぬふるのもおよ夕家あり
仏泉ちまさ無門を月の照
者ちちとう法授ちるとのよ

木
榮
行
文
恒
木
榮
行

ちちかかは拾ある妹の槌
おロさせと静うる色とう
休見の間の永よ伽の役
戒うとう川すいうと見ふ
義の為を一雑又生る上元小
商が解ても罪なる寿

文
恒
木
榮
行
文

秋至り水口もりいつくよりも　周行
見くるふ身のきものく　禾木
戸傳ふ蚊の匂ひのお絨て　正阿
門の住も知る人のうち　万俤
難魚賣ふ声記おる鈴朗　青以
ゑ川の番を歌く南をの　行

形くに行ふ風の音　木
身のむしろを替る一隅　阿
強ふ小擬を立ち見る書　俤
上戸の恥ふ色あり　以
黒石と昭今ゑるも浮世也　行
ちふ石ふも似ぬ編笠の彼し　木
家の新身に行ふ恵うく　阿
陸も面し　橋のまち　俤

六十の長い歩みの老御母
涙もて長かるまれる外うまれる
よしやさとかへいかゆし荒の山　以
長閑なる夜に行く大の鳴　行
うらうらと己の日の移濃つゝ　阿
尋ねてきよそこの近分　木
家之い男かきき藤沙弟　素葉
乃昼い知もし今の意机　行

さう腐やたゝし言葉い誰ゝ注
死人さゝもゝ古人の妹　梁
小夜枕人の雲い余仏ゝ
むゝ羽織かしうゝむ酔ひ　行
風へゝもゝ人ゝもゝ夜ゝ居　木
笑ひや魅ゝ魅ゝ出る法　梁
おのつゝ月のもゝ私の写時　行
翁集の中を通す肌寒　李蹊
荷尚

世渡りは詰小陵等の奥手より　春町

飯くふうちふるふ舊梅　田年

何のもふ薬用まて拂ふ　尚

一字も漢ぬ英書の御　蹊

見出せの拾ひ出ぬ元の袖　年

社日の酒は慈姑より香　町